

東帝文ニュース

EAST TIMOR NEWS

2001年7月21日号

7月9日に現地、東ティモールに到着し早くも二週間が過ぎた。首都ディリ（帝力）の空港は、UNTAET（国連東ティモール暫定行政機構）から東ティモール人に入国管理事務が引き継がれたばかりなのか、仕事振りが初々しい。入国前には、滞在期限は、三ヶ月までしかもらえないと聞いていたけれど、駄目目で、契約期限の九ヶ月を滞在期間にして欲しいと申し出ると、悩みながらではあるが、許可して頂けた。他の日本人にその事を伝えると、「そんなに長いのは、始めてだ。」とロ々に言う。他の人は、滞在期間の延長に苦勞するとの事。幸先良し。

とにかくおいしい酒を探そうと思っていた。私の当面の仕事は、地元の酒を飲みながら年寄り達と歓談する事と決めている。酒は、探さなくても道端に転がっている。首都からエルメラに向かう道路脇で、何やら瓶に入った白い液体を売っている。気になって車を止めてもらい、これは何かとたずねると、お客さん解かっているさるでしょう、だんなのお探しのものですよ、顔に書いてありますよ、ときた。「トゥワ ムティン」（白い酒）。ある種の椰子から取れる地酒（パーム酒）だ。早速味見。うまい。いくら？買った。

5月下旬に、一週間程下見に来訪した時に、赴任先のエルメラ県（東ティモール中部）エルメラ郡エルメラ町に滞在した。その折私を見かけた人達が、私の事を「カトワス カンフー」とあだ名をつけ、彼はまだ来ないのかと噂になっていたようだ。訳せば、「カンフー長老」とでもなりますか。髪の毛が長いせいなのか、その理由は、定かではありません。やっと来たカトワス カンフーは、白酒を抱えている。これで解かった。酔拳。

ティモール島は、四国の二倍位の広さ。東半分が東ティモール、調度四国の広さ。そこに80万人程の人が住む。余裕がある。島国とはいえ、人々の顔つきは、大陸のようで、いろいろ。何万年来には、いろいろな地域の人が寄っては去り、酔っては去りしたのだろう。日本だってそうだったのだ。単一民族で決してない。陸地を歩くより、海を移動した方が早い。いろいろな地域の人が集まっているのだ。椰子の実さえ、伊良子岬に着いている。

東ティモールは、1942年から1945年まで、実質的に日本軍に占領されている。エルメラの町にも日本語で軍歌を歌うおじいさんが居る。昼間から酔っている羨ましい存在。併し、第二次大戦後56年も経て、未だに日本語で歌えるとは、どうやって覚えたのだろうか、気になるところだ。もっとも、日本で慰安婦問題に関連し証言した東ティモール女性は、同じ年数の中忘れられずに今に到っているのだ。蓋し、思い出とは、辛い事の方がいつまでも忘れられないようだ。楽しい事もあった筈なのに、あまり思い出せない。人が未来を生きようとする為には、辛い思い出を忘れずに、その繰り返しをしない事を伝え合う事が必要だということなのだろうか。

この人々は、挨拶する時には、日本人と同様に、お辞儀をする。特に年配の人々は、そうだ。若い人たちがそうしないのは、これも日本と似ていると言える。この習慣は、何時の頃からなのだろうか。まさか、日本軍の置き土産なのではないだろうことを祈る。頭を下げる。踏ん反り返る。どちらが人に優しいか、自明の理。私は、ここに来て良かったと素直に感じている。「愛される事より、愛すること。」とは、有島武朗の謂いである。紛争直後であればある程、愛することが真摯となる。愛されたいなんて思っはいけない。愛してしまえば、愛される事もあるかもしれない。伝達の時には、頭を上げていても、対話の時には、頭を下げよう。

そんな訳でかどうか、出産が多い。同僚の助産婦川口みどりさんは、大忙しだ。皆さんのご多幸を祈ります。

縷紅荘主人
高塚政生 記